

2007.12.22 社会科学基礎論研究会（大正大学巣鴨校舎）

『仏のまなざし、読みかえられる自己』へのコメント（12月16日版）

足立重和（愛知教育大学）

今回のレジュメでは、当日の議論がスムーズに進むよう、あらかじめ著者（＝芳賀先生、菊池先生）に準備しておいてもらいたい中心的な論点だけを提示するにとどめました。これから当日までのあいだに、評者（＝足立）としては、著者の意図をさらに正確に汲み取りながらじっくりと考え、より体系的なレジュメを準備するつもりです。そのような意味で、今回のレジュメは、当日配布するものではなく、“評者の一人としてこのようなことをお伺いしますよ”という程度のものであり、あくまでも当日の1週間前のバージョンであることをお断りさせていただきます。この点、ご理解いただきますよう、よろしく願いいたします（足立）。

本書の評価すべき点→当日のレジュメにて発表。

本書への疑問点＝研究会全体で考えたい論点

○素朴に、ここに登場する弁士や教化委員は、本当に“回心”したのか？

このような問いかけは、本書でいう構築主義的な立場からすれば、“何を今さら”と一蹴されるかもしれない。しかし、本書のような分厚いエスノグラフィーを読んだ評者の一人として、著者たちが弁論大会を詳細かつ緻密に取りあげれば取りあげるほど、何をもち著者たちは「この人は回心した」といえるのか、が気になってしまった。

このような疑問が湧きあがったのは、(1) 本書が構成主義をよりどころにしたために、構成主義がかかえる曖昧な部分を著者たちも暗黙のうちに引き受けてしまった、(2) 弁論大会に焦点をあてる「戦略的高地」(7頁)が本研究の強みであると同時に、その限界も具体的な調査に現われてしまった、という2つの理由からきているのではないかと評者は考えている。

これら理論上の問題である(1)と、調査論上の問題である(2)をより具体的に説明していこう。

(1) 理論上の問題＝“構成”概念のあいまいさ

はたして自己の“何”が変わったのか？

本書の主張：弁論大会までの相互作用にみられる演説内容の改訂→自己の構成＝変容。

本書のポイント：自己物語の変容＝自己の変容や“回心”→回心の社会的構成。

しかしその一方で、本書を読み進めていくうちに、次のような表現にも出会う（引用の波線はすべて評者）。一例をあげると……。

①「およそ二ヶ月間、弁論とともに、亀山さんの自己像（＝自己物語）が、いかに変化していったのか」（118頁）。

②「そもそも、自己物語としての弁論は、その作成プロセスにおいて、彼の『体験』が、徐々に自身にとって意味ある『経験』として構成されていった結果としてあらわれた自己像である。言い換えるならば、弁論とは、この行事を通じて徐々に作り上げられていった亀山さん自身の自己そのものの記録なのである」（122頁）。

③「……原稿の改訂とは、単に文章が変容していくということに止まらず、語り手の自己認識の変化と同時並行で生じるものである」（127頁）

④「この変化は、弁論の構成プロセスにおける、亀山さん自身の周囲の人々に対する意識の変容を表現していると同時に、……」（136頁）

→特に、①の変化は“構成主義的”である一方、④の変化は“本質主義的”である。

演説内容の改訂によって、はたして、「自己物語」が変わったのか、「自己像」が変わったのか、「自己認識」が変わったのか、「自己意識」が変わったのか、それとも「自己」のすべてが変わったのか？（あるいは、「気づいた」のか？「回心」したのか？）

おそらく、著者の立場ならば、「自己物語・自己認識の変化＝自己の刷新・変化」なのだろうが、はたして〈認識的なもの〉が変わることで、自己のすべてが劇的に刷新・変化するのだろうか？〈認識的なもの〉が変わることは、「自己」と呼ばれる領域にどれくらいインパクトをあたえるのだろうか？以上の点は、次の論点とも深くかかわってくる。

研究者は何をもって「変化した」といいうるのか？

第3章における5人の弁士たちへの聞き取り、あるいは、第4章における、最終稿に対して弁士たちが「本当の自分である」と感じていることを裏づけるためのアンケート調査のデータ（注31、312頁）から→**当事者たちのいう「変化した」という語りを、構築主義者である著者たちは、まともに受け取りすぎてはいないだろうか？**構築主義的な見方に依拠するならば、この「変化した」「気づいた」「回心した」という語りは、ある意味で当事者の心の**状態**に言及したものであって、常に“括弧入れ”すべきものなのではないだろうか？

「自己物語」「回心」「気づき」それら自体の社会的構成を論じるよりも、構築主義的な宗教社会学者としては、当事者たちが（一過的？な）「変わった」「回心した」「気づいた」という語りを手がかりにしながら、「仏のまなざし」「仏の存在」「仏のお導き」という独特のリアリティがいかにして立ち現われるか、に分析を集中すべきなのではないか（とはいっても、著者たちは、この点もしっかりと考察されておられ、その記述・分析については他分野を専攻する者としてたいへん刺激を受けた）。



なぜ以上のような疑問を評者はもってしまうのか。それは、「弁論大会が時代的に変化した」とされる第Ⅳ部において、現在の弁論大会が、1990年代後半以降、消費社会と親和性を持ちながら、全体的に「静か」になっていき、そこで語る青年たちも青年部とかかわらずに「内閉化」しているのならば、そう簡単に「変化」「回心」「気づき」が弁士たちの自己の領域すべてに及んだり、ずっと持続したりするとは思えなかったからだ。このような評者の疑いについて、著者たちはどのようにお考えなのだろうか？

(2) 調査論上の問題＝インタビューの場という制約、「戦略的高地」の限界

インタビューが行われた場という制約？

もし上述した評者の疑いが妥当であるならば、著者たち（インタビューを受けた弁士からすれば、「仏」の使い）が行った聞き取りの場（教団内部？で、しかも、肩書きをもつ他の信者も同席）では、個々の弁士たちは「変わった」「回心した」「気づいた」と語らざるをえなかったのではないだろうか？ それこそ「ソフトな権力」がはたらいていた時間・空間だったのではないだろうか？ その一方で、そのような時空間から外れたとき、弁士たちは、何を語るのだろうか？

「戦略的高地」の限界？

では、本当に「回心した」かどうか、あるいは、「気づいた」かどうか、「変わった」かどうかを探っていくために、われわれ研究者は、素朴に、弁論大会以後の、あるいは、教団以外の弁士たちの生活（特に宗教生活）を調査すればいいではないのか。

ところが、本研究では、弁論活動にかかわる回心の社会的構成をみることで教団（ひいては宗教、神）の介入を考察するという宗教研究上の「戦略的高地」から、弁論活動以外の生活を研究対象から外している。確かに、そのような戦略を立てることで、著者たちの試みは成功している。それ以上、評者が問うことは、“無いものねだり”になるだろう。

しかし、“自己の構成”の曖昧さから本書の議論を追っていくならば、“自己物語の変化＝自己の変容”をより説得的にするためには「戦略的高地」がかえってじゃまになるように感じるのは、評者だけなのだろうか？

以上、今回のレジュメでは不正確な点などが多々あるかもしれません。それらについては、他の細かい論点とあわせて、当日のレジュメ・報告で正確を期すことにいたします。